学外諸団体との協働 及び

本学教員・附属機関(施設)による活動

大学としての取り組み

被災者を対象にした減免措置 及び ボランティア参加学生への対応

■ボランティア活動時における参加規則及び交通費補助について

【活動対象】

東日本大震災に関わり、被災地（宮城県、福島県、岩手県）で行うボランティア活動を対象とする。ただし、活動参加前に大学に対し所定の様式で申請し、かつ、活動参加後に大学が指定する活動報告を行ったものに限る。但し、公欠は原則として１つの授業につき１回までしか認めない。

【参加条件】

①ボランティア保険への加入。

②未成年の場合は保護者の同意を得ること。

③指定された申請書を出発1週間前に大学に提出すること。

④活動参加後に大学が指定する活動報告会において報告を行うこと。

⑤活動は自己責任で参加するものとし、活動によって学生自身が損害・傷害を被った場合、その補償は学生自身が加入するボランティア活動保険において行われ、大学はその損害・傷害を一切補償しないことに留意すること。

■入学志願者の検定料免除及び授業料の減免措置

2012～2014年度入試に際し、東日本大震災で被災された受験生に対する入学検定料の免除措置及び入学決定者に対する授業料の減免措置を講じました（2014年度時点で、採用実績2名）。

【概　要】

【1】入学検定料の免除措置　全入試カテゴリーに於いて入学検定料を全額免除。

【2】対象者　①災害救助法適用地域に住居

②警戒区域・計画的避難区域・緊急時避難準備区域に住居

③その他、物的及び人的被害を被った方

【3】授業料の減免措置 被災程度（物的・人的）に応じた授業料の減免措置を修業最短期間に渡り実施。

【4】被災程度に応じた減免等

■ＦＤ＆ＳＤ研修会

2011年4月5日に、教職員全員によるＦＤ研修会が行われ、東日本大震災を覚えての礼拝と「私にできること」のアンケートを実施しました。また研修会では、これまでの東日本大震災に関連しての取組みが紹介され、参加者にはこれから自分たちに何ができるのかをアンケートを通して回答いただきました。

教会との取り組み

被災地（気仙沼）へ支援物資搬送

日　程	2011.3.28
参加者	教員1名（河田チャプレン）・神学生
場　所	宮城県気仙沼市・石巻市・亘理町 など

2011年（平成23年）3月11日14時46分18秒。宮城県牡鹿半島の東南東沖130キロメートル、仙台市の東方沖70キロメートルの太平洋の海底を震源とする東日本大震災が発生しました。地震の規模はマグニチュード9.0。発生時点において日本周辺における観測史上最大の地震でした。この未曾有の大震災直後でありながらも、ルーテル教会をはじめ世界の教会から、多額な献金を日本のルーテル教会に送られました。その献金はまず被災者にとって必要な物資の購入のために用いられました。その支援物資搬送作業に同行するボランティアが急遽ルーテル学院にも求められ、河田チャプレンと神学生が参加しました。この神学生は日本福音ルーテル教会仙台教会出身の神学生であり、真っ先にボランティア参加の意志を示してくれました。大型トラック三台に分乗し、宮城県の気仙沼、石巻、亘理町に水、米、バナナ、カップラーメン、レトルト食品などを搬送しました。その搬送物資を受け取り、被災者に配ったのは、曹洞宗が取り組んでいる国際ボランティアグループ「シャンティ」であり、まさに宗派を超えた取り組みがなされ、宝鏡寺（宮城県気仙沼市川原崎）を支援物資の倉庫として使用させていただきました。また、非常に危険な状態の中、いつもの数倍も掛けて運転し、物質搬送に協力してくださったトラック運転手も段ボールひと箱に自分の上着、また家族から預かった支援物質などを詰め込んで、被災地にそっと置いてきていたことが印象的でした。

学外諸団体との協働

チャイルド・ファンド・ジャパン

被災後の子どものこころのケアの手引き発行

ルーテル学院大学は、特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパンと協働して上記『被災後の子どものこころのケアの手引き』（監修・執筆　ルーテル学院大学臨床心理学科・谷井淳一教授、加藤純教授）を発行しました。本手引きは、チャイルド・ファンド・ジャパンの加盟団体であるChild Fund International(発行当時 Christian Children's Fund)が、2001年9月11日に米国で発生した同時多発テロ後１周年に向けて作成した"Remembering September 11th:A Manual for Caregivers"をもとにしたものです。チャイルド・ファンド・ジャパンのボランテイアの皆さんが翻訳し、ルーテル学院大学が監修して訳を整え、東日本大震災の状況に合わせて一部加筆しました。この手引きは、被災された子どもを支援される方々（特に教育関係、福祉関係のみなさま）および保護者による中長期的な子どものこころのケアのために活用していただくためのものであり、2011年4月11日に両法人のホームページにアップロードされました。

第2章
子どもたちの回復力の構築を助ける

1. 家族にできること

●日本語版

●英語版

http://www.luther.ac.jp/news/110411/index.html

- 監修・執筆：臨床心理学科　谷井淳一教授・加藤純教授
- 2011年4月25日に印刷製本版が完成。26日より希望者に配布開始。
- 2012年12月19日現在で17,000部を印刷し、15,530部を配布（うち大船渡市での配布数は282部）。
- 被災地で暮らす外国人のために翻訳版の希望が寄せられ、英語版をジェームス・サック先生の監修のもと作成し、さらに、中国語訳、ハングル訳、タガログ語訳をそれぞれ1,100部製本。10月1日以降、希望者に配布を開始。配布実績は2012年12月19日現在で、英語版664部、中国語版393部、ハングル語版370部、タガログ語版340部。
- 配布先からは「非常に読みやすい、活用していきたい」という感想が寄せられました。

学外諸団体との協働

チャイルド・ファンド・ジャパン

被災後の子どものこころのケアの支援

※本学教員の活動Ⅳ「被災地から子ども達が参加したキャンプに協力」と一部内容が重複しています。

臨床心理学科の先生方を中心に、外部講師の先生のご協力のもと、チャイルド・ファンド・ジャパンの支援を受け、宮城県、岩手県でワークショップおよび講演「被災後の子どものこころのケア」を実施しました。また、2011年11月より、臨床心理相談センター相談員の方を交え、大船渡市私立大船渡保育園にて保護者対象の個別相談、市内私立保育園の保育士を対象に研修会を実施しました。事後アンケートでは、「今後に生かせる」という回答が過半数となり、「保育士の学びと気づきにつながった」、「参加してよかった」と評価する回答が多く寄せられました。

※プログラムNO.17-20は「東日本大震災ルーテル教会救援」の資金援助を受けて、大船渡保育園を訪問しました。

子どものこころのケア ワークショップ・プログラムの実績

NO	月日	地域	講師	対象	プログラム内容	支援
1	2011/6/25	宮城県（仙台）	谷井・田副・作田	保育士	小児科医、臨床心理士による子どもの心身のケア。自律訓練法。	チャイルド ファンド ジャパン
2	2011/7/17	岩手県	谷井	岩手アウトドアチャレンジ実行委員会および関係者	被災地でのキャンプ実施上、注意点	
3	2011/8/6/7	岩手県（青少年交流の家）	加藤	岩手しぜんとあそぼキャンプinテンパーク 学生リーダー	グリーフケア研修、キャンプヘアドバイザーとして参加	
4	2011/9/17-19	岩手県（少年自然の家）	加藤	岩手県キャンプ協会インストラクター養成講習参加者。	被災者の心理・傾聴とその留意点・インストラクターの役割・ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞの実際	
5	2011/10/1	宮城県(登米市)	サック・高城	宮城県被災地の外国出身の母親、子ども、その支援者	子どものこころのケアについて	
6	2011/11/5	岩手県(盛岡)	谷井	ガールスカウト岩手県支部で開催する東北、北海道地区成人研修	おとなと子どものこころのケア	
7	2011/5/6	岩手県（青少年交流の家）	加藤	岩手しぜんとあそぼキャンプinテンパーク学生リーダー	8月6-7日のキャンプの秋企画	
8	2011/12/12	大船渡保育園	白井・米良・長田	大船渡保育園の保育士 、大船渡保育園に子どもを預けている保護者	個別相談、保育士への「こころのケア」の講義	
9	2012/2/7	大船渡保育園	米良・分島	大船渡保育園に子どもを預けている保護者、大船渡保育園保育士、市内９つの保育園の主任保育士	個別相談、保育士のお茶っこ会	
10	2012/3/6	大船渡保育園	加藤・分島		個別相談、保育士のお茶っこ会	
11	2012/5/10	岩手県(盛岡)	加藤	（社）岩手県青少年育成県民会議と会員25団体	被災後の子どものこころのケア講演	
12	2012/6/19	大船渡保育園/赤崎保育園	米良・分島	大船渡保育園の保育士、大船渡保育園に子どもを預けている保護者、赤崎保育園の保育士	個別相談、講習会	
13	2012/8/20	大船渡保育園/明和保育園	長田・加藤	大船渡保育園の保育士、大船渡保育園に子どもを預けている保護者、明和保育園の保育士	個別相談、講習会	
14	2012/9/13	大船渡保育園	加藤・米良	大船渡保育園の保育士、大船渡保育園に子どもを預けている保護者	個別相談	
15	2012/10/23	大船渡保育園/盛保育園	米良・分島	大船渡保育園の保育士、大船渡保育園に子どもを預けている保護者、盛保育園の保育士	個別相談、講習会	
16	2012/12/3	大船渡保育園	加藤・米良	大船渡保育園の保育士 、大船渡保育園に子どもを預けている保護者、猪川・赤崎・末崎・明和保育園の保育士	個別相談、講習会	
17	2013/5/20	大船渡保育園	加藤・米良	大船渡保育園の保育士 大船渡保育園に子どもを預けている保護者	保育士との懇談及び個別相談	東日本大震災ルーテル教会救援
18	2013/7/23	大船渡保育園	米良・分島			
19	2013/9/17	大船渡保育園	加藤・米良			
20	2013/2/20	大船渡保育園	米良・長田			

被災後の子どものこころのケアの支援
事例紹介 ＜Program No.1＞

被災地の子どものこころとからだのケアについてのワークショップ開催

2011年6月25日（土）仙台市市民活動サポートセンターにて、チャイルド・ファンド・ジャパンとルーテル学院大学の協働事業である第1回目の「被災後の子どものこころとからだのケアについてのワークショップ」が開催されました。保育園の先生を中心に22名の参加者がありました。午前中は、本学社会福祉学科の原島博教授による「協働事業の趣旨」の話の後、臨床心理学科・谷井淳一教授が「子どものこころの問題の捉え方」という講義を行い、そのあと参加者に自己紹介を兼ねて一言ずつ「この研修に期待すること」を話していただきました。午後は、本学臨床心理学科の田副真美准教授による「自律訓練法の体験」の実習を行いました。最後に実施したアンケートからは、全般的に満足した参加者の方からの感想が寄せられました。

谷井教授の「今日の体調チェック」

田副准教授の「自律訓練法の体験」

被災後の子どものこころのケアの支援

事例紹介 ＜Program No.3＞

被災地域の小学生を招いた岩手でのキャンプに協力

日程	8/6（土）～7（日）
内容	テント設営・ネイチャーゲーム・野外菓子作り、キャンプファイア、テント片付け・乗馬・絵馬作り
主催	岩手県キャンプ協会 ・岩手県レクリエーション協会・岩手県ネイチャーゲーム協会・盛岡ＹＭＣＡガールスカウト日本連盟岩手県支部・日本ボーイスカウト岩手連盟
共催	乗馬とアニマルセラピーを考える会「馬っこパーク・いわて」、国立岩手山青少年交流の家、公益財団法人ボーイスカウト日本連盟
協賛	全国乗馬倶楽部振興協会 、チャイルド・ファンド・ジャパン

2011年8月6日（土）～7日（日）、岩手県滝沢村・国立岩手山青少年交流の家 で「岩手しぜんとあそぼキャンプ in テンパーク」がおこなわれ、被災地域の小学生29名が参加しました。7月17日（日）当日に先立ち、スタッフ向けにキャンプにおけるグリーフケアについて本学臨床心理学科・谷井淳一教授が事前研修を担当しました。キャンプ当日は、本学臨床心理学科・加藤純教授が参加し、子ども達にすばらしい関わり方をしていた大学生リーダー達を臨床心理士として見守り支援に携わりました。

キャンプの様子

被災後の子どものこころのケアの支援

事例紹介 ＜Program No.4＞

岩手県キャンプ協会の講習会でグリーフ・ケア研修に協力

2011年9月17日（土）から19日（月）、盛岡市立区界高原少年自然の家にて、岩手県キャンプ協会が主催する「キャンプインストラクター養成講習会」が開催されました。社団法人日本キャンプ協会が共催し、チャイルド・ファンド・ジャパンとルーテル学院大学が協力しました。キャンプインストラクターを目指す参加者5名、紫波町で町起こしや絵本の朗読に携わっているボランティア5名と、キャンプ協会スタッフが参加しました。19日の午前と午後、キャンプにおけるグリーフ・ケアについての講義と演習を本学臨床心理学科加藤純教授が担当しました。ギャンプインストラクターの役割、傾聴の基本、被災した子どもの心理やキャンプ中の関わりの留意点などについて、ロールプレイやディスカッションを交えて学びました。気温が15度に下がる中、参加者の熱意で充実した研修になりました。

養成講習会の様子

被災後の子どものこころのケアの支援

事例紹介 ＜Program No.10＞

海外出身ママとママを支援する人たちのための学びの会を宮城で実施

2011年10月1日（土）、宮城県登米市で「海外出身ママとママを支援する人たちのための学びの会～大震災後、子供達の心とどう向き合うか？」 というタイトルのワークショップが開催され、本学からはジェームズ・サック教授と高城絵里子専任講師が講師として参加してきました。中国、韓国、フィリピン、タイ出身のママたちと、海外出身ママを支援する人たち、さらに子どもたちやパパたちも来場し、総勢40人以上の参加者で大賑わいのワークショップとなりました。ワークショップでは、まず、海外出身のママたちとそれぞれの震災後の状況を分かち合い、続いて「子どものケアとセルフケア」について、サック教授と高城専任講師とが通訳を介してお話をしました。また、本学がチャイルド・ファンド・ジャパンと協働して４月に発行した『被災後の子どものこころのケアの手引き』の中国語、韓国語、タガログ語版がこの日に合わせて発行され、参加者の皆さんにも届けられました。海外出身ママたちは、日本で生活することによるストレスに震災のストレスも加わって大変な思いをしていらっしゃることと、それでも子育てと復興に奮闘されている様子がよく伝わってきました。そんなふうにここまで一生懸命がんばってきたママたちが、このワークショップで同郷のママたちと日ごろの思いを打ち明けあい、自身のストレスや子育てについて振り返りながら、少し息抜きできたことの意義は大きかったようです。

各国語訳『こころのケアの手引き』

サック教授の講義「子どもとのコミュニケーション」

被災後の子どものこころのケアの支援
事例紹介 ＜Program No.8/9/10/12-20＞

岩手県保育園での「子どものこころのケア」

臨床心理学科では、東日本大震災で大きな被害を被った岩手県大船渡市の保育園で、2011年12月から「子どものこころのケア」の活動を行ってきました。これは、チャイルド・ファンド・ジャパンとの協働事業のひとつとして、2013年2月まで継続して行われました。「子どものこころのケア」となっていますが、内容としては、保護者と保育士さんの個人面接と保育士さん方のミーティング、それにストレスを乗り切るための講習など主に、子供を見守る側の心のケアを中心に進めました。初回は2011年12月12日に実施し、訪問者は本学からは白井幸子教授（現：ルーテル学院大学名誉教授）、臨床心理相談センターの相談員の長田律氏、米良哲美先生が参加しました。

主任保育士さんとのお茶を飲みながらのミーティング

保育士さんたちとの記念写真

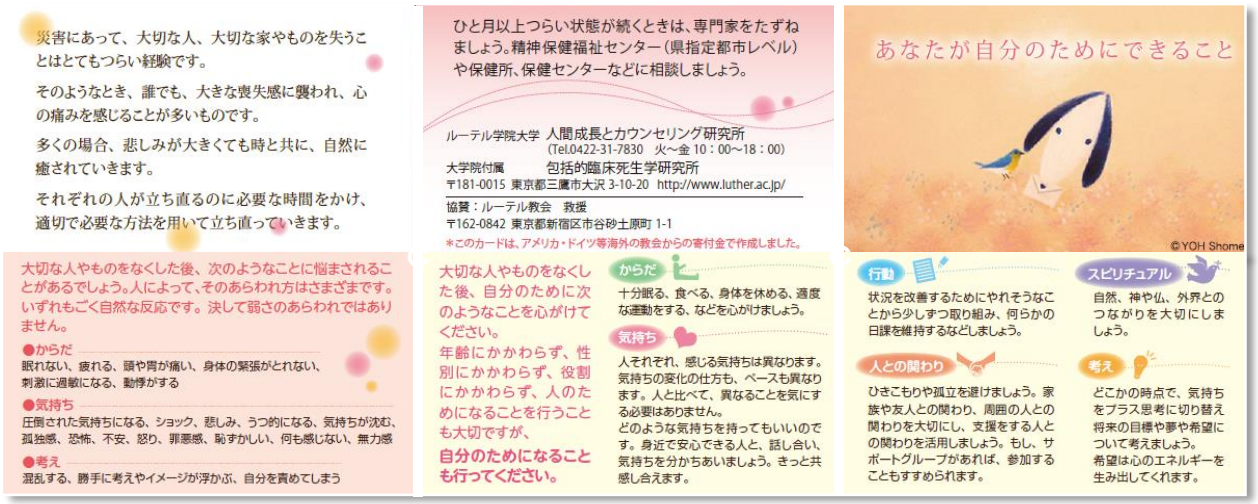
講習の風景

外部団体との協力・協働

特定非営利活動法人日本ヘルプセンター

震災後のセルフケアカード配布

ルーテル学院大学は、特定非営利活動法人日本セルプセンターと協働して『震災後のセルフケアカード』の配布しました。このカードは、震災後の悲嘆（グリーフ）に関する基本的な考えと、セルフケアの大切さをわかりやすくよびかけた、3つ折の名刺サイズカードです。被災地でもある宮城県内の障害者授産施設へ発注をして、専用のウェットティッシュとセットにして、被災された方に広く配布していただけるよう１万個を用意しました（※『震災後のセルフケアカード』は、本学ＨＰもしくは下記URLから自由にダウンロードできます）。被災者(避難所で生活されている方に限らず、身近な方や大切なものをなくされた方々)へ配布してくださる方も募り配布しました。セルフケアカードに記載されている相談先は、本学付属研究所の「人間成長とカウンセリング研究所（PGC）」になっており、電話相談の対応を行いました。



災害にあって、大切な人、大切な家やものを失うことはとてもつらい経験です。

そのようなとき、誰でも、大きな喪失感に襲われ、心の痛みを感じることが多いものです。

多くの場合、悲しみが大きくても時と共に、自然に癒されていきます。

それぞれの人が立ち直るのに必要な時間をかけ、適切で必要な方法を用いて立ち直っていきます。

大切な人やものをなくした後、次のようなことに悩まされることがあるでしょう。人によって、そのあらわれ方はさまざまです。いずれもごく自然な反応です。決して弱さのあらわれではありません。

●からだ
眠れない、疲れる、頭や胃が痛い、身体の緊張がとれない、刺激に過敏になる、動悸がする

●気持ち
圧倒された気持ちになる、ショック、悲しみ、うつ的になる、気持ちが沈む、孤独感、恐怖、不安、怒り、罪悪感、恥ずかしい、何も感じない、無力感

●考え
混乱する、勝手に考えやイメージが浮かぶ、自分を責めてしまう

ひと月以上つらい状態が続くときは、専門家をたずねましょう。精神保健福祉センター（県指定都市レベル）や保健所、保健センターなどに相談しましょう。

ルーテル学院大学 人間成長とカウンセリング研究所
（Tel.0422-31-7830　火～金 10：00～18：00）
大学院付属　包括的臨床死生学研究所
〒181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-20 http://www.luther.ac.jp/
協賛：ルーテル教会　救援
〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町 1-1
＊このカードは、アメリカ・ドイツ等海外の教会からの寄付金で作成しました。

大切な人やものをなくした後、自分のために次のようなことを心がけてください。
年齢にかかわらず、性別にかかわらず、役割にかかわらず、人のためになることを行うことも大切ですが、
自分のためになることも行ってください。

からだ
十分眠る、食べる、身体を休める、適度な運動をする、などを心がけましょう。

気持ち
人それぞれ、感じる気持ちは異なります。気持ちの変化の仕方も、ペースも異なります。人と比べて、異なることを気にする必要はありません。
どのような気持ちを持ってもいいのです。身近で安心できる人と、話し合い、気持ちを分かちあいましょう。きっと共感し合えます。

あなたが自分のためにできること

© YOH Shome

行動
状況を改善するためにやれそうなことから少しずつ取り組み、何らかの日課を維持するなどしましょう。

スピリチュアル
自然、神や仏、外界とのつながりを大切にしましょう。

人との関わり
ひきこもりや孤立を避けましょう。家族や友人との関わり、周囲の人との関わりを大切にし、支援をする人との関わりを活用しましょう。もし、サポートグループがあれば、参加することもすすめられます。

考え
どこかの時点で、気持ちをプラス思考に切り替え将来の目標や夢や希望について考えましょう。
希望は心のエネルギーを生み出してくれます。

特定非営利活動法人 みやぎセルプ協働受注センター
〒981-1102　宮城県仙台市太白区袋原五丁目12-1　仙台ワークキャンパス内

※このプロジェクトにかかる費用は、アメリカ・ドイツ等海外の教会からの「ルーテル教会救援」へ寄せられた寄付金でまかなっています。

震災後のセルフケアカード　http://www.luther.ac.jp/news/110609/dl/card.pdf

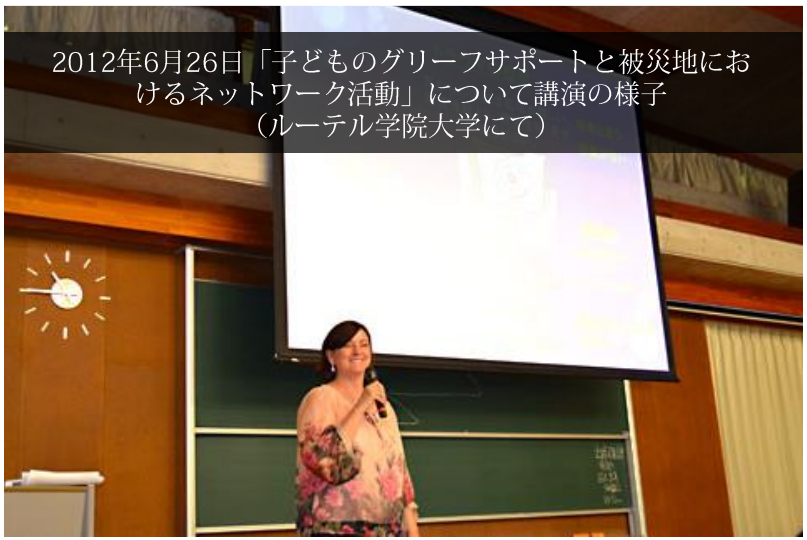
学外諸団体との協働

Kids Hurt Too , Hawaii

Kids Hurt Too , Hawaiiは、ハワイで10数年に渡り、子どものグリーフサポートを専門として活動を続けてきた団体です。東日本大震災発生後、ルーテル学院大学は、Kids Hurt Too, Hawaiiの人びとが、日本で活動をすることを支援しました。本団体による活動の中心を担っているのは、団体のエグゼクティブ・ディレクターであるシンシア・ホワイト氏、伊藤正裕氏です。活動は、2011年8月・11月、2012年6月・11月、2013年6月・11月の、合計6回の来日、被災地における滞在日数42日以上で、累計300名以上の子どもとその家族に、グリーフサポートに関する情報提供や、ネットワークづくり、サポートグループのファシリテータートレーニングなどを提供しました。

2012年6月26日には、Kids Hurt Too , Hawaiiのシンシア・ホワイト氏(Executive Director)を本学にお迎えし、「子どものグリーフサポートと被災地におけるネットワーク活動」について、講演をしていただきました。当日は、約180名の方の参加（本学学生を含む）を得て、講演会が行われました。トラウマとは何か、どのように対応する必要があるのか、グリーフとは何か、どのように対応すると良いか、子どものトラウマやグリーフへの対応についてご講義いただきました。トラウマ体験した人や、子どものグリーフワークになぜ、プレイセラピー、アートセラピー、そして、グループセラピーが適切で必要であるかということが非常によくわかる内容の講演でした。Kids Hurt Too , Hawaiiはその後、東松島市、釜石市、盛岡市などで講演し、被災地で子どものグリーフサポートグループを継続的に行うためのファシリテーター養成講座等を提供しました。

Kids Hurt Too , Hawaiiのホームページ
http://www.grievingyouth.org/wordpress/



2012年6月26日「子どものグリーフサポートと被災地におけるネットワーク活動」について講演の様子
（ルーテル学院大学にて）

シンシア・ホワイト氏　プロフィール

Kids Hurt Too , Hawaii のエグゼクティブディレクター。教育学修士(M.Ed.)。グリーフとトラウマを抱える子供達に29年関わってきた実績を持ち、阪神・淡路大震災の際も日本でボランティアのトレーニングや、被害を受けた子供達の心のケア、親と死別した子供達に関する調査などに携わった。大学や福祉・医療機関で子供達のグリーフ・トラウマケアに関わる関係者へのトレーニングにも力を注いできた。オレゴン州ポートランドにある「ダギーセンター」（The National Center for Grieving Children and Families）で7年に渡りトレーニングディレクターを務め、インターナショナルシンポジアムではアメリカ全土にとどまらず世界中の関係者のトレーニングに関わった。Kids Hurt Too , Hawaiiの設立者の一人。

本学付属機関・施設の活動

コミュニティ人材養成センター

自殺危機初期介入スキルワークショップ

福島県からの招へいを受けて、本学付属機関のルーテル学院大学コミュニティ人材養成センターが提供する「自殺危機初期介入スキルワークショップ」を開催しました。当日は、福祉・保健・医療の相談援助の専門職及び、企業の人事担当者、精神保健ボランティア、民生委員、保健協力員など多職種の参加を経て開催され、所用時間6時間15分の、実践的な研修を行いました（※2011～2012年度は震災後のセルフケアカード（ウェットティッシュ付き）提供）。自殺危機初期介入スキルワークショップは、2009年より全国各地で開催され、2014年３月末現在で340回以上開催され、受講者数は6,900人を超えています。

【講　師】

ルーテル学院大学 総合人間学部 社会福祉学科　教授・福島喜代子　ほか

日程	場所
2011/11/7	福島県いわき市
2011/12/8～9	福島県田村市
2012/10/14	宮城県涌谷町
2012/11/5	福島県いわき市
2012/11/25～26	福島県田村市
2013/11/7	福島県いわき市
2013/12/5-6	福島県田村市
	受講者数合計　400名

コミュニティ人材養成センターは、本学の社会貢献・地域連携活動の拠点として、コミュニティにおける「人に関わる人材」の養成活動を展開することを目的に、2009年度に本学附属機関として設置されました。具体的には、以下の4つの事業を実施しています。

- ●人に関わる専門職に対する研修
- ●地域づくりに関わる活動者の養成
- ●地域の行政、関係機関・団体との連携事業
- ●地域の関係機関・施設等における本学学生の実習・体験活動等の調整

コミュニティ人材養成センターＨＰ
http://www.luther.ac.jp/guide/affiliate/human/index.html

自殺危機初期介入スキル研究会ＨＰ
http://jisatsu-kainyu-ken.blogdehp.ne.jp/

本学付属機関・施設の活動

包括的臨床死生学研究所（ＣＣＴＣ）

～グリーフワークの視点に基づく援助者に対するプログラム～

包括的臨床死生学研究所は、ルーテル創立100周年を記念して、大学院付属の研究所として2009年に設立され、臨床死生学に基づく包括的研究活動を重視し、対人援助者に対する包括的養成プログラムの開発をすることを目的としています。本研究所では、喪失と悲嘆作業に関する介入モデル構築の研究、対人援助トレーニングの提供、プログラム評価やトレーニングの効果検証、ネットワーキング形成、国際的協働による研究体制の構築などを行っています。

■支援者支援に特化した取り組み

CCTCには毎年３０人前後の対人援助の研究者と実践者が研究所研究員として、人の尊厳を第一に、研究活動を行っている。そうした当研究所の特性を生かして、震災直後の直接的な援助ではなく、被災地における支援者＝援助の担い手である対人援助職へのサポートプログラムを展開してきた。3年で述べ４５３名の支援者(ここでは高齢者福祉、臨床心理、医療、精神保健福祉分野の専門職)への支援活動を実施した。具体的には被災地で利用者・家族の相談にあたる相談員やケアスタッフで①外部からの支援者：日本医療社会福祉協会MSW、福島県、京都府、大分県のMSW協会、日本社会福祉士会会員、武蔵野赤十字病院関係者DMAT,当研究員、②被災地での援助活動に参加した現場スタッフの人々：避難所スタッフ、東北３県と近隣のMSW協会会員、大船渡市社会福祉協議会の職員、生活支援相談員、みやぎ宅老連絡会の職員と傘下事業所のスタッフ、みやぎ心のケアセンター職員（精神保健福祉士）、大船渡市の民間事業所仮設住宅団地の支援スタッフ。③避難した先での困難を抱えた被災者をはじめとする関係者の支援にあたる地域の支援者（包括支援センター職員、MSW等）である。2011年4月に検討を開始してから2014年3月23日までの３年間に２４回実施し、被災地へ訪問は１５回で複数回の訪問地も4箇所に及んだ。

■支援者支援に有効だった援助技術とその根拠となる理論

主に対人援助者（専門職）に対して行った支援者支援のプログラムは「グリーフワーク・スーパービジョンプログラム」で、リフレクティング・チーム・アプローチ（RTA）を中心に3時間のセッションを3名の講師(福山和女所長、照井秀子、御牧由子、森朋子研究員の組み合わせ)で実施した。本プログラムの目的は支援者の職業的喪失へのサポートの提供であるが、具体的には①対象者の支援に活性化を図るためのサポート、②対人援助の専門家としての疲弊に対するサポートである。　2011年は誰もが駆り立てられるように援助に向かったが、多くの支援者は専門職であるがゆえに、「何かできることをしたい」との強い思いで被災地での活動を行っていた。しかしあまりの大きな物心両面の喪失の前に、無力感と焦燥感に自信をなくしていた。リフレクティング・チーム・アプローチによって、被災者だけでなく彼ら自身が役割や意義を喪失していたことに気づき、他者に認めてもらうことで、グリーフにある自分をそれでいいのだと受け止められるということを体験した。つまり支援活動で起こったことは、専門職がアイデンティティ、役割、生き様、他者との関わりのそれぞれの価値や意義を見失った状態（グリーフ）に陥っていたということであり、直面したことを理解するプロセスがこのプログラムの効果であつた。また、被災者としても支援者としても2重の喪失を体験した現地スタッフには、短時間のプログラムが、彼らの深い内面に踏み込まず、傷つけず、他者も自身をも、「人の尊厳を護る」という意味での環境をもたらした。「今ここで」のグリーフワークであり、SW実践であった。セッション後半には、グリーフワーク理論（喪失・悲嘆概念）をポーリン・ボス著『「さよなら」のない別れ　別れのない「さよなら」～曖昧な喪失～』(2005)をプレゼントし、グリーフについて解説。また「慰めのハート」の意義を伝え、被災地の高齢者の方の手作りのハートを選んでもらった。別のプログラムでは「認めの手紙」の交換を参加者同士で行うなど、有形のプレゼントは視覚的にも、体感をもてた意味でも効果的であった。＊「慰めのハート」とはレイチェル・ナオミ・リーメンの著書「MY GRANDFARTHER'S BLESSINGS」のなかの一章である「HOLDING ON TO THE HEART」このプログラムの成果は（1）専門家としての自己価値の確認（2）人と関係する交互作用から発生する諸課題の取り組み方の理解と確認（3）人の尊厳(自己、他己)の保持の必要性の確認（4）個別対応の重要性の再確認（5）生活場面のもろもろの喪失がもたらす影響性の理解と云うことができる。

■関係機関との協働

CCTCならではの支援者支援の活動が効を奏した背景には、多くの関係機関団体の存在が大きい。まず最初に、ルーテル学院大学は東日本大震災における支援活動の一環として、チャイルド・ファンド・ジャパンとの協働事業に取り組んだ。CCTCはその一翼を担い、2年間に渡って、支援者支援活動を展開した。チャイルド・ファンド・ジャパンが資金面、関係機関との調整等に当たり、石巻の福祉避難所では日本医療社会福祉協会と、大船渡市では大船渡市社会福祉協議会や民間団体（株）ジャパンクリエイトとの三者協働が実現した。それとは別にルーテル教会救援よりの依頼により、みやぎ宅老連絡会という現地で高齢者サービスを展開する被災団体との協働で現場の切実な声に対応できた。更に日本社会福祉士会や京都府社会福祉士会、大分県MSW協会、武蔵野日赤病院等の関係団体との協働により各地で支援者支援プログラムが実現したことは、被災地が東北3件にあっても、支援者は全国にいて、取り組み続けている専門職や関係スタッフ自身が支援を求めていることを実感させられた。このようにさまざまな実践組織との協働なしには、このプログラムは実現しなかったと考えると、これからの活動にも、多くの他関係機関との連携協働が欠かせない。更なる課題に向けてCCTCとしても柔軟に対応できる体制を維持していきたいと考える。

■2011年度の活動

◆ ①包括的臨床死生学研究所のホームページに被災地支援の研究員活動を掲載し、被災地の支援状況を伝えた。

◆ ②支援者支援のグリーフワーク・プログラムを実施。

【プログラム実施者】

・福山和女所長・御牧由子特別研究員・照井秀子事務局長

➢ 【チャイルド・ファンド・ジャパンとの協働支援プログラム】

・期間：7月～11月までに１０回

・対象数：185名

・石巻（日本医療社会福祉協会MSW）5回述べ40名

・東京（武蔵野市包括支援センター職員）1回8名

・京都（京都社会福祉士会会員）　1回10名

・大船渡（大船渡市社会福祉協議会、生活支援相談員）1回12名

➢ 【郡山】　福島県MSW協会　研修1回

100名　グリーフワーク1回15名

➢ 【東京】　ケアマネジャー他　1回24名

➢ 【東京】　当研究員　1回7名

■2012年度の活動

◆ チャイルド・ファンド・ジャパンとの協働支援

・プログラム3回

・対象数45名

・大船渡（大船渡市社会福祉協議会、生活支援相談員）18名

・大船渡（ジャパンクリエイトの職員で仮設住宅団地の支援員）

１回目１5名、2回目12名

◆ ルーテル教会救援活動との協働

・対象数１0名

・宮城県東松島（みやぎ宅老連絡会の2事業所のスタッフ）9名

・宅老事業所代表者との面談1名

◆ みやぎ心のケアセンター定例研修会

・対象数37人

・仙台（みやぎ心のケアセンター職員・精神保健福祉士等）37人

◆ 京田辺市役所障害福祉課主催研修会

・対象数70名

・京都（地域住民と保健、医療、福祉の専門職）70名

◆ グリーフワーク・プログラムの外部評価

インタビュー（CFJ）照井秀子

◆ 東京（MSW,生活支援員他）　1回23名

■2013年度の活動

◆ ルーテル教会救援活動との協働３回

・対象数47名

・宮城県仙台他（みやぎ宅老連絡会の事業所のスタッフ）

１回目13名、2回目13名、3回目21名

◆ 新潟県老人福祉協議会研修

・対象者90名

・新潟県燕三条（施設職員、生活相談員、ケアワーカー、看

護師、PTほか）90名

◆ 調布市地域ケアの輪研修

・対象者48名

・調布（社会福祉士、介護福祉士、医師、看護師、ほか）48名

◆ 大分県医療ソーシャルワーカー協会研修

・対象者68名

・別府（大分県、鹿児島県、宮崎県MSW、他）68名

本学教員の関わり

市川一宏教授・学事顧問

■石巻市社会福祉協議会・第二次地域福祉活動計画策定委員会アドバイザーに就任

石巻市が策定した石巻市地域福祉計画と連携し、地域福祉事業を継続的・安定的に行うことができるようにするため、誰もが安心して暮らせる福祉のまちづくりを推進し、住民、行政、社会福祉協議会の三社のパートナーシップのもと、石巻市における地域福祉の向上が図られるよう石巻市社会福祉協議会地域福祉活動計画策定に、市川一宏教授が委員会アドバイザーとして協力しました。

■石巻市ボランティアセンターアドバイザーに就任

2014年6月1日より、市川一宏教授が石巻市ボランティアセンターのアドバイザーに就任しました。同センターは、石巻市社会福祉協議会が従来のボランティアセンターの体制を強化したもので、河北新聞にも取り上げられました。

石巻市社協の高橋会長より辞令交付

石巻・ボランティアセンター再出発

地域福祉強化の要に

仮設住民支援　傾聴講座開設

NPOなどと連携

本学教員の関わり

学会・講演・シンポジウム

市川一宏教授

■2013年度

- 被災地における民生委員児童委員活動
  全国民生委員大会
- 岩手県民生委員児童委員会長・副会長研修会

■2014年度

- 陸前高田市民生委員児童委員研修会
- 石巻市地域福祉フォーラム
  震災からの地域の再生コミュニティのあり方を考える
- 宮城県社会福祉協議会会長・事務局長会議
- 日本キリスト教社会福祉学会
  21世紀キリスト教社会福祉実践会議合同仙台大会

日本キリスト教社会福祉学会

民生委員児童委員活動全国民生委員大会

石巻市地域福祉フォーラムでの講演

岩手県民生委員会長・副会長研修会

本学教員の関わり

「災害後の悲嘆（グリーフ）の理解と対応」論文の 日本語訳を本学教員が担当

福島喜代子教授・ジャン・プレゲンズ教授・田副真美准教授

この論文"Managing Grief After Disaster"は、米国National Center for PTSDのホームページに掲載されているものです。東日本大震災後、2011年3月25日に、執筆者Dr. M. Katherine Shear（コロンビア大学大学院社会福祉学専攻精神医学教授）ご本人の許可を得て、全文をルーテル学院大学で日本語に翻訳し、本学のホームページにて提供することにしたものです。

【日本語訳：ルーテル学院大学】

- 社会福祉学科　教授・福島喜代子
- 臨床心理学科　准教授・田副真美
- 教授・ジャン・プレゲンズ

【論文の構成】

- 悲嘆（グリーフ）の過程
- 悲嘆（グリーフ）の経験
- Traumatic Grief（外傷性悲嘆）
- 死別体験のもたらす好ましくない結果
- 死別を複雑化する（複雑性悲嘆となる）危険因子
- 死別を体験した者への治療や支援
- 専門家の役割（災害後、初期の段階における悲嘆に関する専門家の役割）
- 死別体験の複雑化に対する治療戦略

■論文の日本語訳ダウンロード「災害後の悲嘆（グリーフ）の理解と対応」

1、ホーム画面ＴＯＰＩＣＳ

2、東日本大震災への本学関連の支援について

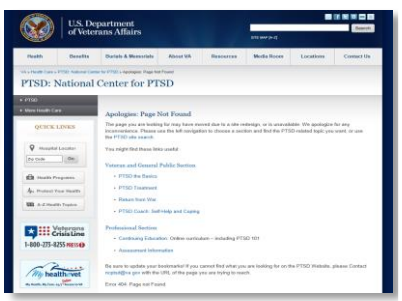
3、「災害後の悲嘆（グリーフ）の理解と対応」論文の日本語訳

http://www.luther.ac.jp/news/110331/index.html

原文は以下のWebsiteをご覧ください。

米国NATIONAL CENTER FOR PTSDのホームページ

http://www.ptsd.va.gov/professional/pages/managing-grief-after-disaster.asp



本学教員の関わり

フィリピン大学で東日本大震災被災者を覚える蝋燭の点燈式に参加

原島博教授

「2011年8月7日～15日にかけてフィリピン大学社会福祉地域開発学部主催による地域防災管理セミナー（Community-Based Disaster Management Seminar）が開催されました。フィリピンにおいても台風による大規模な災害、火山噴火など日本と類似した災害が頻繁に発生していることから“防災とレジリエンスの文化を築く”と題した研修会が行われました。このセミナーに本学の原島博教授が招待参加して、３．１１の東日本大震災の事例報告を行いました。ちょうどルーテル学院大学の学生ボランティア活動を実施した直後でもあり、現場から見た被災地の状況、人びとの避難所での生活での暮らしの様子、半壊家屋に暮らす方々の生活課題、障害者世帯、高齢者世帯、また多くのものを一瞬に失った人々の心の問題、原発のリスクなど多様な課題が発生していること、そしてそれらへの取り組みや支援の方向性について報告しました。セミナーの中間にあたる8月11日に、東日本大震災後5か月を覚えて、フィリピン大学の学生、教職員が被災地の復興を願い、ろうそくを灯してお祈りをささげてくださり、一緒になって祈りと支援を捧げて下さっているフィリピンの方々に対して短い報告と感謝のメッセージを伝えました」

支援による感謝の意を伝える原島博教授
（フィリピン大学・パルマホール前）

被災者へのお祈りと、蝋燭の点灯式の様子
（フィリピン大学・パルマホール前）

本学教員の関わり

被災地から子ども達が参加したキャンプに協力

アウトドアチャレンジ岩手 しぜんとあそぼキャンプ in テンパーク　　加藤純教授

※学外諸団体との協働Ⅰ「チャイルドファンドジャパン・被災後の子どものこころのケアの支援」と一部内容が重複しています。

日　時	2011年 / 8月6日～7日 11月5日～6日
	2012年 / 11月3日～4日
	2013年 / 2月9日～11日 11月2日～4日
	2014年 / 1月11日～13日 （2014年11月1日～3日）
場　所	国立岩手山青少年交流の家
主　催	アウトドアチャレンジ岩手県実行委員会（構成団体=岩手県キャンプ協会／岩手県レクリエーション協会／岩手県シェアリングネイチャー／盛岡YMCA／ガールスカウト日本連盟岩手県支部／日本ボーイスカウト岩手連盟／日本国立岩手山青少年交流の家）

チャイルド・ファンド・ジャパンの支援を受けて2011年8月と11月に参加した「アウトドアチャレンジ岩手しぜんとあそぼキャンプ in テンパーク」には、2012年度以降も主催者に経費を負担していただき、参加を続けています。内容は、釜石市、大船渡市など岩手県沿岸部から小学生4～6年生30～100名が参加し、自然に親しむゲーム、星空観察、雪遊び、乗馬体験、野外調理、伝統芸能「虎舞」作りなどを楽しみました。ルーテル学院大学の教員は、学生ボランティアリーダーへの事前研究を担当し、キャンプ中は子どもへの関わりに工夫が必要な場面でリーダーをサポートしました。

本学教員の関わり

被災地から子ども達が参加したキャンプに協力

生きる力キャンプ　加藤純教授

※学外諸団体との協働Ⅰ「チャイルドファンドジャパン・被災後の子どものこころのケアの支援」と一部内容が重複しています。

主　催	（公社） ガールスカウト日本連盟
共　催	ガールスカウト岩手県連盟 ガールスカウト宮城県連盟 ガールスカウト福島県連盟
後　援	文部科学省 ・ 国立花山青少年自然の家 ・ 岩手県 ・ 宮城県 ・ 福島県教育委員会・子どもの心と身体の成長支援ネットワーク ・ 東日本大震災支援全国ネットワーク ・ガールスカウトアメリカ連盟支援事業子どもゆめ基金・ （独立行政法人国立青少年教育振興機構）助成活動

2012年8月10日(金)～12日(日)、ガールスカウト「いきるちからキャンプ2012」が開催されました。福島県、宮城県、岩手県から小学生と中学生、約140名が参加しました。グループリーダーやプログラムの準備や進行などを担当したのは、全国から集まったガールスカウトの会員など約70名でした。ルーテル学院大学は、東日本大震災ルーテル教会救援の補助を受けて、臨床心理学科・加藤純教授を臨床心理士として派遣しました。8月9日に心のケアに関する事前研修を担当し、キャンプ期間中は、医師1名、看護師3名と共に健康サポートチームの一員としてキャンプ参加者の体と心の健康を支えました。「いきるちからキャンプ」には2013年8月9～11日にも研究費により参加しました。